

ブラジルからアフリカへ

ディアスポラのもうひとつの「帰還」

矢澤達宏

はじめに

古くより世界の歴史は、人々が自身の民族的故地から引き離される悲劇には事欠かない。しかし、商品として無数のアフリカ人をはるか大海を隔てた異郷の地へと連れ去った大西洋奴隷貿易は、その性格、規模において他に類を見ない歴史的惨劇だった。単に離郷を強いられたというだけでなく、行く先や同伴者についてさえ当のアフリカ人たちには選択の余地がまったく与えられていなかったのだ。もっとも、こうした悲痛な体験の鮮烈さは世代が替わるにつれ薄れてはいったかもしれない。ただ、少なくとも米州のアフリカ系人の行く手には、望むと望まざると、そして意識するとしないうとにかかわらず、常に父祖の地アフリカの存在が見え隠れしてきたことだけはたしかだ。「ディアスポラ」(離散)という語によって彼らを形容するのも、彼らとアフリカの間にそうした世代を超えた関係が存在すればこそである。

米州のアフリカン・ディアスポラとアフリカの間の関係には、時代や地域の違いに応じて様々な局面が存在した。本稿でとりあげるブラジルの黒

人によるアフリカへの帰還も、そうした局面の一つとみなすことができる。19世紀のブラジルと西アフリカの間に見られた、この特殊個別的な現象を、ディアスポラを介して米州とアフリカにまたがる大きな流れのなかで位置づけようとするのが本稿のねらいである。

1 ブラジル黒人のアフリカ帰還現象とは

米州でもっとも多くのアフリカ人奴隷を受け入れたのがブラジルであることは知られていても、のちに彼らの一部がいま一度大西洋を渡りアフリカの大地を踏むにいたったことは、あまりなじみのない事実かもしれない。では、どういった経緯で、どのくらいの人々が、どのようにして、この「復路」をたどったのだろうか。

ブラジルのある人類学者は、1820年から1889年までに8000人強の黒人がブラジルからベニン湾岸(現在のガーナからナイジェリアにかけての大西洋沿岸地域)各地に移り住んだと推計している。彼らのほとんどはブラジル北東部の旧都バイーア(現在のサルバドール)付近の者たちだったが、帰還の動きに火を付けたのは、まさにこの町を舞台にした一

つの反乱だった。ムスリムの奴隷・解放奴隷を中心に計画された、この1835年の「マレー反乱」

(Revolta dos Males)は蜂起前夜に発覚し、警察により未然に鎮圧された。しかし、その規模は奴隷反乱の珍しくなかった19世紀前半のバイーアといえど未曾有のもので、白人社会を震撼させるには十分だったのだろう。当局は検挙した解放奴隷154人をアフリカへの強制送還とし、以後とくに自由身分の黒人に対し様々な弾圧を加えていったのである。強制送還のような特殊なケースを除き、アフリカへの帰還は基本的に当人の意志に基づき、自前で渡航手段を手配するというかたちでおこなわれたが、黒人に対する激しい迫害が背後で大きく作用していたことは疑いない。

ブラジルとの訣別を望んだ黒人たちの多くは、しかしながら帰還先のアフリカ社会に溶け込んでいったわけでもなかった。彼らはカトリシズムやポルトガル語、ブラジル風の生活様式に執着し、いうなれば「ブラジル帰」コミュニティを形成して、当初はむしろ現地のアフリカ人との差異化をはかった。おもに商業活動に従事し、経済的には富裕層をなしたが、20世紀に入ってから次第にコミュニティとしての特質は色褪せていった。それでも、人名や建築、祝祭など、往時をしのばせる名残は現在でもベニン湾岸各地に見られる。

ところで、このブラジル黒人の帰還現象の特徴はどういったところにあるのだろうか。まず第一に、帰還者の出自という要素がかなり関与していたことがうかがえる。帰還者の大半が世代的には「アフリカ生まれ」であり、出自でいえば帰還者にはヨルバが多かった。というのも、18世紀末よりバイーアとベニン湾の間では前者のタバコと後者の奴隷を直接取り引きする貿易が盛んになっていて、当時のバイーアは急激かつ大量に流入してきたヨルバ奴隷であふれかえていたからだ。と

すれば、多くの場合、自らの出自にほぼ忠実な、本来の出身地への帰還が実現していたことになる。実際、近年の様々な研究は、19世紀前半のバイーアではアフリカ生まれの黒人の間でエスニック・アイデンティティが存続していたことを指摘している。解放奴隷や「ネグロ・デ・ガーニョ」(negro de ganho)の名で知られる奴隷(街頭で物売りや駕籠かきなどに従事し、売り上げの一部を主人に納める奴隷)など、行動の比較的自由な者たちが多かった市街地では、日常生活の場面によっては出自による分化が見られた。「ジュンタ」(junta)と呼ばれた互助組織や、街角のたまり場「カント」(canto)、当局許可のもとでおこなわれていた日曜ごとの余興「バットゥーケ」(batuque)などはその典型だ。出身グループごとに組織される傾向にあったこれらの集まりが、それぞれの帰属意識を再確認する場になったというのである。

第二の特徴として、帰還が基本的に当人の自発意志によるもので、費用に関しても個々人の自己負担だったという点が挙げられる。ブラジルの支配層の間では、公費負担によってでも解放奴隷たちを組織的にアフリカに送還すべきだとの声も聞かれたが、それを実行に移せるほどの財政的余裕が当時のブラジルにあるはずもなかった。渡航費を自ら工面せねばならなかった以上、アフリカに帰還できたのは黒人でも困窮の極みにあった者たちというわけではなかったろう。とすれば、動機として風当たりの強いブラジル社会からの逃避以上の積極的な何かを想定したとしても、それほど見当はずれではあるまい。

最後に三番目の特徴は、アフリカへの帰還というイシューに対して、バイーアの黒人の間から何らの組織的な態度表明もみられた様子がないことである。彼らの見解は賛否両論だったが、いずれも個人的な反応の域を出るものではなかった。

2 リベリアへの植民運動との比較から

対象が何であれ、その特徴を見いだすには何らかの基準となるものが必要だ。前節でブラジルからの帰還現象の特徴を指摘した際に「ものさし」としたのは、ほぼ時期を同じくして見られた米国のアフリカ植民運動である。アメリカ植民協会が中心となって2万人近くの黒人を送り出し、アフリカ最初の黒人共和国として一人立ちさせたりベリアの方が、エピソードとしてははるかに知名度が高い。やはり「故郷への帰還」などと評されることの多いリベリア入植であるが、実はブラジル黒人の帰還とは好対照をなしている。具体的にはどのような違いがあったのか。前節で挙げた三つの点にしたがって見ていくことにしよう。

まず出自に関しては、リベリアへの入植者に占める「新大陸生まれ」世代の割合はブラジルの場合に比べて高く、ある特定のエスニック・バックグラウンドを持つ者が突出していたという形跡もない。それに、なによりも入植候補地の選定自体がアメリカ植民協会の都合でまったく恣意的になされたのであって、入植者の出自などはそもそも二の次にされていたのだ。本人または祖先がリベリア付近の出だという者が、入植者のなかにどれだけいたというのだろうか。つぎに自発性に関連しては、入植は当人の志願が原則ではあったものの、白人名士たちが名を連ねる植民協会によって組織的に推進された事業だったため、経費を本人が負担する必要はなかった。ましてや農園主のなかには入植の承諾と引き換えに奴隷を解放する者も少なくなかったから、過酷な労働や差別に苦しむ奴隷や自由黒人たちが、たとえ「故郷」に対する特別な思いを抱いていなくとも、苦難に満ちた日常から解放されたい一心でアフリカ行きを決意した

としても不思議はない。少なくとも表明されたものに関するかぎり植民事業に対して批判的な見方が自由黒人の間で大勢を占めていたことを考え合わせるなら、植民事業はむしろ黒人の厄介払いの手段としての色彩の方が強かったとはいえないか。すでに三番目の点にも論が及んでしまっているが、米国の場合は植民運動の浮上を機に自由黒人たちが各地で黒人大会を開催し、植民事業に対し概して批判的な姿勢を打ち出すにいたっている。

これで両者の性格の相違がある程度、浮き彫りになったのではないか。米国黒人のリベリア入植は、実際は白人支配層主導の黒人追放策という面が色濃く、入植を選んだ黒人の側にも苛酷な運命からの逃避願望に並置しうるような誘因を見いだしがたい。それに対し、ブラジル黒人の帰還の方はより自発的で、動機にもより積極的な要素の存在を思わせる。バイーアの黒人たちをアフリカへと向かわせたのは、やはり「望郷の念」だったのだろうか。一般的にはディアスポラとアフリカの間の絆をむやみに絶対視するようなことは慎まれねばならない。リベリアへの入植にしてもブラジルからの帰還にしても、黒人への迫害が大前提であったことに変わりはない。それに、ブラジルからの帰還者すべてが「アフリカ生まれ」の世代だったわけではないし、もしも故郷での失われた暮らしを回復するのが願いだったなら、「帰郷」を果たしてなお現地の社会に対してわざわざ距離をおこうはずもない。ただ、帰還にあたって家族をとらなっていたら子供たちが必然的に「新大陸生まれ」の割合を増やしたであろうし、「ブラジル帰り」たちの姿勢にしても彼らを迎える側の対応をうけてのことだと説明できなくもない。出自を同じくしていたとしても、ひとたびヨーロッパ文明の洗礼を受けた者たちが、はたしてなんの隔たりもなく地元に受け入れられたであろうか。いずれにせ

よ、積極的な動機と消極的な動機のどちらが決定的だったかはともかく、いま挙げた点のみをもってしては前者の介在の否定にはならない。米国の黒人から入植への批判が表明されたのは、それが米国黒人全体の境遇改善には必ずしもつながらないという認識が支配的だったからにほかならないが、パイアではアフリカ帰還をブラジル黒人全体の運命と結びつけようとする発想自体、芽生えてはいなかったようにみえる。同じアフリカ系として差別と偏見に満ちあふれた新大陸を生きていくというディアスポラ同士の連帯感より、アフリカと個々の黒人とを結ぶ、より原初的な意識の方がまさっていたということなのだろう。

おわりに

ポルトガル語には「サウダーデ」という言葉がある。日本語では「郷愁」などと訳されたりするが、実際には、遠く離れた愛情を抱く人や事物に対する切ない、淋しい、悲しい、懐かしい、甘い、快い、ほろ苦い、といった様々な思いがない交ぜになった感情を指す、他の言語には類のない語だ。故郷や家族のもとから無理矢理連れてこられた奴隷たちが、アフリカに対する「サウダーデ」を感じずにいたはずがない。彼らの間では「バンゾ」と呼ばれたホームシックがしばしばみられ、絶望のあまり自殺した者さえ珍しくなかった。これはなにもブラジルだけにかぎったことではなく、米州全体でみられたことだ。

しかし、歴史に実際に刻まれたアフリカへの「帰還」に関していえば、「望郷の念」はどの程度関わっていたのか。今世紀に入ってから、マーカス・ガーヴィーをはじめ「帰郷」を夢見るアフリカン・ディアスポラは後を絶たなかった。にもかかわらず

ず、米国黒人がリベリアに入植し、ベニン湾岸に「ブラジル帰り」が定着して以降、個人的なものを除いて大がかりな「帰還」は実現していない。その理由は様々だが、少なくともそれはディアスポラのアフリカ意識が薄れたからというわけではない。こんにちまでの歴史を通してみれば、ディアスポラにとっての「アフリカ」とは往々にして象徴的なものだったのであり、ディアスポラの「思い」が現実のアフリカを相手に実を結ぶ機会、そもそも少なかったからだ。ただし、奴隷貿易が遠い過去となりつつあった時代のディアスポラに「帰還」を志させたのは、実際の生まれ故郷に対して抱くような愛着ではなく、自らのルーツとの絆にある種の宿命性をみてとる認識だったであろう。一方、19世紀にはところどころでまとまった「帰還」が実現したもの、米国の植民運動などは、見方によっては奴隷貿易に対する白人側の体のいい後始末にすぎなかった。その意味では英国艦隊が奴隷船取り締まりで保護したアフリカ人のシエラレオネ送還もそう変わりあるまい。これらはディアスポラの実際の移動をともなっていたとはいえ、そこに彼ら自身の意志が反映されていたかどうか、そもそも疑わしい。

アフリカに向けてブラジルをあとにした者たちの動機に、「サウダーデ」がどの程度占めていたかを判断するのは難しい。それは帰還者それぞれによっても異なっていただろう。しかし、少なくともかなりの人々が実際の故郷に、自らの意志によって、自力で戻ったことだけは間違いない。計画で終わったものを含め、ほとんどが括弧つきの帰還だったなかで、「ブラジル帰り」たちの経験は文字どおりの帰還と言うに値する、まれな例だったといえるのではないかな。

(やざわ・たつひろ/慶應義塾大学大学院)